

清流瀬田川の畔、伽藍山を背後に控える石山寺は、境内に国指定天然記念物の珪灰石をもつ山号「石光山」と呼ばれ、近江八景の一つ「石山の秋月」として江戸時代には多くの浮世絵師によって描かれる景勝地として有名です。

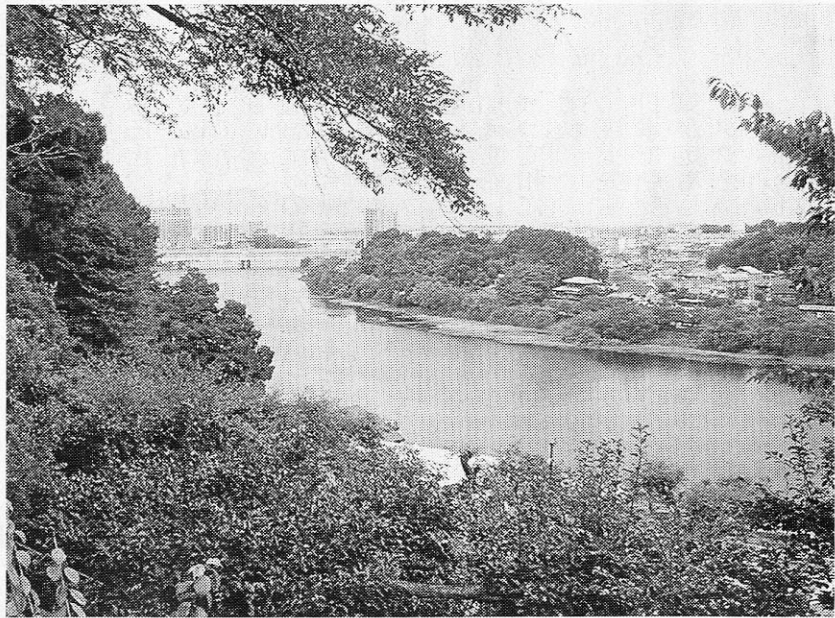
奈良時代に官制の寺として建立された石山寺は、平安時代になると真言密教の教学の寺としての性格を増すとともに、観音霊場として信仰の対象となり、多くの人々が参詣するようになりつづきます。延喜17年(917)には宇多天皇も参詣し、平安京から近く、安全であることから京の清水寺と共に、皇族女性、貴族やその子女による参詣・参籠の地として人気を博します。こうした中には藤原道綱の母、紫式部、清少納言、和泉式部、菅原孝標の女などの王朝女流文学の作者も多く、御堂で読

経しながら一夜を過ごす参籠が流行り、その様子が随筆や日記に記されています。

寛弘元年(1004)に7日間の参籠を行った紫式部は、8月15日の夜、月が琵琶湖あるいは瀬田川に映る風景を眺めながら、『源氏物語』須磨、明石の2帖を起筆したと伝えられ、式部が参籠したという部屋は「源氏の間」として現在の石山寺に保存されています。こうした源氏物語の起筆伝承は、土佐光起、英一蝶から和田英作にいたる近年まで、多くの画家によっても紫式部石山寺参籠図あるいは観月図として描かれる題材となつていきます。

『蜻蛉日記』では、天禄元年

石山寺参籠



石山寺から瀬田川を望んだ光景

年(970)7月20日頃、作者石大将藤原道綱の母が京を夜明けに出発して、逢坂の関を越えて牛車で打出の浜まで

に記されています。その後、御堂で祈り、明け方とうとう眠った時に、寺の別当と思われる法師が鉢子に水を入れて持ってきて、道綱の母の右膝に注ぎかける夢を見たという一部始終も明らかにされています。75年後の寛徳2年(1045)に石山寺を訪れた菅原孝標の女は、『更級日記』の中で、雪の降る中、石山寺へ参籠し、御堂で勤めをしていた時に見た夢は、きつと良い夢であると思いつつも、行を続けたと綴っています。こうした皇族や貴族の参詣・参籠の様子は、鎌倉時代末に『石山寺縁起絵巻』として描かれ、先に挙げた『蜻蛉日記』や『更級日記』の場面もいきいきと描かれています。

石山寺は、その後、観音霊場としてだけではなく、紫式部や『源氏物語』ゆかりの寺として、江戸時代には松尾芭蕉も訪れ、浮世絵『石山の秋月』によって庶民にも広く知られる名所となり、さらに多くの人々が訪れるようになりました。

「秋月」で庶民に知られる名所に

(財団法人滋賀県文化財保護協会 中村健二)